

卯辰山碑マツプ

卯辰山は金沢城の向かいに位置することから、金沢市民には「むかいやま」と呼ばれ親しまれている。高さ141.2m、周囲約8km余り、春日山・観音山・愛宕山・茶臼山など多くの峰や丘の集まりで、これら峰や丘の間には鶯谷・梅谷などの谷があり、鶯・梅・紅葉の名所といわれてきた。

卯辰山という名称は古くから使われており、その由来は種々あるが何れも確かとはいえず二つの山を指しているのではなく、周囲の峰々を総称して「卯辰山」と呼んでいる。

明治43年に市有公園地になり、公園として本格的に整備が始められた。大正3年に初めて公園に併用され、翌4年に西口の堀・厚坂を改修。昭和2年に北口に汐見坂新道を拓き、その他の登り口や公園も拡張整備され市民の便が図られてきている。

卯辰山が一般に開放され、公園になってからは、顕彰碑・功勞碑・歌碑・句碑・書碑などの建立の場としても市民に利用され、いつのころからか卯辰山に「碑林」という言葉を冠せ、その周辺山麓一体は、憩いの場・散策の場となり、今日では金沢の歴史探訪の場ともなっている。

卯辰山碑掲載一覧

- | | | |
|-----------------|-------------------|----------------|
| 1 瀬の白糸碑と瀬の白糸像 | 21 井並長太翁の像 | 41 三雲塚 |
| 2 石敢当 | 22 日蓮上人銅像 | 42 金沢九谷陶宗木米窯跡碑 |
| 3 「種松作隆鎮」の碑 | 23 牧奥村三葉頌徳碑 | 43 高村右衛門塚 |
| 4 徳田秋声墓 | 24 鶴村川柳句碑 | 44 開道記念碑 |
| 5 尾山篤二郎歌碑 | 25 西村公鳳句碑 | 45 臥雲島田先生之碑 |
| 6 浅見大素句碑 | 26 殉職警官の碑 | 46 芭蕉巡錫地記念碑 |
| 7 潮の置き 矩亭成 | 27 殉職消防団員之碑 | 47 森下冬青句碑 |
| 8 西田幾多郎先生旧跡 | 28 由比勘兵衛塚 | 48 堀田紅葉句碑 |
| 9 泉鏡花句碑・比翼塚 | 29 相撲場記念碑 | 49 春日山少彦名命廣碑 |
| 10 織村流水歌碑 | 30 旅館型小笠原氏世界平和祈願碑 | 50 孤庵馬仏句碑 |
| 11 精忠報国の碑・荒尾富三郎 | 31 徳田秋声文学碑 | 51 中村芝加十郎墓 |
| 12 安達幸之助の碑 | 32 金沢市民憲章の碑 | 52 田中雨人句碑 |
| 13 招魂社跡記念碑 | 33 岡良一顕彰碑 | 53 算聖関先生之碑 |
| 14 北越戦争の碑 | 34 キリスト教殉教者の碑 | 54 竹内菊蘭句碑 |
| 15 隠岐五位水野君の碑 | 35 北方風景書碑 | 55 松田東英墓 |
| 16 退筆塚 | 36 金沢大学解体解体の像・碑・墓 | 56 蓮如上人銅像 |
| 17 三浦彦太郎君之碑 | 37 卯辰山公園開設記念碑 | 57 桜井梅室句碑 |
| 18 津田米次郎翁碑・像 | 38 落葉招き記念碑 | 58 柳陰軒跡碑 |
| 19 日本中国友誼団結の碑 | 39 島田逸山顕彰碑 | 59 初代・中村歌右衛門の墓 |
| 20 清水誠先生顕彰碑 | 40 深川仁太郎氏碑 | |



1 瀧の白糸碑と瀧の白糸像

浅野川は、泉鏡花の出世作『義血侠血』の舞台である。瀧の白糸はその主人公で、秀麗の水芸人であった。像の作者は得能節朗である。

2 石敢当

中国伝来の災除けの石柱。平成20年7月の集中豪雨で、浅野川が氾濫し、かなりの流域が被害を被った。被災地に住む一篇志家が中国の故事に則り、この碑を建てた。

3 「種松作龍鱗」の碑

三代藩主前田利常の時代に植えられたと聞く並木町一帯の松並木を大正15年に町内会が補植したのを記念に建立した碑。“松を植えて龍鱗と作る”と刻されている。

4 徳田秋声墓碑

1871～1943

明治4年(1871)金沢の生まれ。明治27年(1894)尾崎紅葉の門に入る。明治・大正の代表的作家。昭和57年(1982)秋声の骨を分骨、建立した墓碑には、井上靖の揮毫で「徳田秋声墓碑」と刻まれている。また、墓碑を囲む白い土牆に同じく井上靖の筆による「冷厳なる自己監視と澄明な客観描写をまんに据えた典型的な庶民文学」と絶賛する副碑がはめ込まれている。

5 尾山篤二郎歌碑

1889～1963 歌人・文学者

金沢市横安江町生まれ。東京に出て窪田空穂・前田夕暮・若山牧水らと交わる。宮中歌会始めの選者も務めるなど、日本歌壇の最高峰に立つ。歌碑は、浅野川天神橋上流に架かる常盤橋詰の料亭「ごりや」の前庭にある。昭和41年(1966)建立の碑には「あさあさと流るる水の瀬のとなやながきみのみ心にやあれなや浅野川 篤二郎」と刻まれ、裏面は篤二郎の略歴が記されている。ごりやの主人で親交の深かった川端与蔵の建立。



6 浅見大素句碑

1838～1894 足袋商・俳人

本名朝見次六、金沢生まれ。明治の初め藩札引換所に勤め、のち足袋商を営む。槐庵五世大常の孫に当たり、明治15年(1882)槐庵八世菅谷真澄の後を継ぎ九世となる。了願寺の前庭左手に「隠るるに草はみじかし 初蛙 槐庵九世大素」と刻まれた大素の句碑がある。左側面には明治30年3月 朝見素全建之と建立者を刻んでいる。島林甫立の書。

7 潮の響き 矩幸成

1903～1980 彫刻家

金沢市玄蕃町生まれ。昭和3年(1928)東京美術学校彫刻科本科卒業、日展会員・審判員・評議員を歴任。昭和44年金沢大を定年退職し名誉教授となる。金沢市内の主な記念碑として、殉難乙女の像(卯辰山)・自由と正義の像(中央公園)・鈴木大拙先生の碑(本多町)・浄(武蔵ヶ辻)などがある。天神橋を渡って卯辰山への坂(記念新道)を上がりはじめると、すぐに扁厚坂への分かれ道にでる。ここ自宅の前に、幸成の最終作「潮の響き」の像が、昭和56年妻邦子によって建てられた。

8 西田幾多郎先生旧跡

1870～1945 哲学者

石川県かほく市宇ノ気町の生まれ。明治27年東京大学哲学科修了後、西洋近代哲学を研究。同33年(1900)三々塾をつくり、四高生を指導、かたわら禅道の修行にも励んだ。「善の研究」などの哲学書を著し、昭和16年文化勲章受賞。ここは西田幾多郎が参禅のため約9年間通った、国泰寺住職雪門禅師の草庵「洗心庵」の跡である。記念新道を登っていくと最初のカーブ左手に、「西田幾多郎先生旧跡」と記された石標が建てられている。天野貞祐の書。



9 泉鏡花句碑・比翼塚

1873～1939 小説家

本名は泉鏡太郎、金沢市生まれ。明治23年上京し、24年尾崎紅葉の門に入る。同29年の「照葉狂言」でその本領を発揮するに至った。彼の作品は、抑圧された庶民、ことに女性への同情を主題にしていたといえる。記念新道を上ると洗心庵跡の一段上のカーブに昭和22年(1947)泉鏡花顕彰会建立の碑が建っている。碑面上部に「鏡花先生の碑」下部には「はこひし夕山桜峰の松 鏡花」の句が刻まれ、裏面には略歴などが刻まれる。文字もはつきりとはしなかったが「比翼塚」と製作年と思われる「文政十二己丑…」を刻んだ古い自然石が、鏡花句碑のすぐ横にさりげなく置いてあった。心中した者を憐れんで作られたのを、だれかが運んできて置いたらしい。何となく、鏡花の風情にふさわしく感じられた。その石も何処かに運ばれ、その跡に今は比翼塚と刻んだ新しい石が置かれている。



10 綱村流水歌碑

医師・俳人

本名藤沢基行、金沢市生まれ。明治32年伯母の綱村家の養子となる。昭和2年(1927)歌詠「閑古鳥」に入会、同21年「新雪」を創刊、その主宰となる。花昌蒲園の右、卯辰三社への登り口の左手に、昭和41年古希を祝って綱村流水歌碑建設委員会によって建てられた歌碑がある。表には「冬潮はひたぶるよせて川口の洲をつくるときに白く波あぐ」と刻み、裏面には流水の略歴が刻まれている。

11 精忠報国の碑 荒尾富三郎

1668～1905 軍人

金沢生まれ。明治20年海軍兵学校を首席で卒業、日清日露戦争中は海軍の中樞で活躍した。明治38年(1905)日本海会戦のとき、不幸にも過労で急死した荒尾富三郎を悼んで碑が建てられた。題字は連合艦隊司令長官東郷平八郎元帥、碑文は第三艦隊司令長官片岡中將の撰である。精忠報国の碑は卯辰三社へ登る千軒坂の段の途中、右手に3m余りの大きな碑が石組の上にある。



12 安達幸之助の碑

1824～1869 加賀藩士

本名安達寛稟、金沢生まれ。藩命により江戸に出て、西洋兵学を村田蔵六(後、大村益二郎と改名)に学び、明治維新には益二郎と共に徴兵令・廃刀令・陸海兵学校新設などの立案に参画した。明治2年京都の宿で刺客に襲われ益二郎と共に倒れた。墓は野田山墓地にある。豊国神社参道の千軒坂から三の坂を登ると右側に「動皇家安達幸之助君之碑」と刻んだ石柱を前に、明治5年(1872)勝海舟の撰文による賛辞を刻んだ御影石の碑があるが、今は風化が進み判読不可能である。道路沿いには略歴を記したブロンズ板がはめ込まれた横長の自然石がおいてある。



13 招魂社跡記念碑

昭和12年4月、卯辰山官祭招魂社委員によって建立。明治元年(1868)越後奥羽の乱(戊辰戦争)のとき戦死した103名を祭ったもので、同10年西南の役の戦死者をあわせ祭り、その後、日清戦争・日露戦争の戦死者など、金沢に師団司令部があった第九師団関係の戦没者をあわせて祭った。昭和10年(1935)社殿を出羽町に移し、同14年には石川護国神社と改称している。招魂社跡地には、明治3年建立の招魂社建設記念碑(金沢藩文学教師金子惺撰文・佐藤齋の書)や、ここを永く後の人々に伝えようとして有志によって昭和12年に建てられた記念碑の他にもいくつかの記念碑などが建っている。

14 北越戦争の碑

慶応4年(1868)越後の幕府軍追討の戦いで、加賀藩から7600人余を、出兵し、長岡藩との戦いに参加、戦いは200日余にわたり、加賀藩の戦死者も103人に達した。明治3年(1870)藩知事前田慶寧は碑を建て(現在は不明)、戦死者の名を刻んだ碑を造って霊を祭り、招魂社のもとをつくった。八基の墓(慰霊碑)は跡地右奥、玉垣に囲まれて並んでいる。



15 贈従五位水野君の碑 水野寛友 加賀藩士

通称徳三郎、金沢市生まれ。明治元年(1868)北越戦争で一部隊長として活躍し、6戦死し、大正9年(1920)従五位を追贈された。昭和10年(1935)遺族らによってこの碑が建てられた。招魂社跡から玉兎ヶ丘への出口近くに、鉄平石の大きなこの碑がある。



16 退筆塚

退筆とは筆先の禿びた筆であり、それを納める塚が退筆塚である。この碑を書いた市河遂庵は幕末の三筆といわれた市河米庵の後を踏襲した市河遂庵である。彼もまた書に巧みであった。塚は2基建っている。

17 三浦彦太郎君之碑

1869～1939 製造業

金沢生まれ。16歳から製箔を学び、のち自分で工場を設けた。電動式の製箔機を発明し、現在の金沢箔の基を築いた。記念新道から観音院への分かれ道のカーブ右側にこの碑がある。昭和13年(1938)翁の古希を記念して建立された碑の上部には、もと銅像があったが戦時中供出された。現在は顕彰の辞を記した石板をはめ込んだ碑になっている。

18 津田米次郎翁碑・像

1862～1915 織機製造

金沢生まれ。明治13年(1880)木綿力織機を案出した。わが国の動力織機の初めである。のち津田式綿力織機の完成をみた。豊田佐吉の綿自動力織機とほぼ同時代である。さらに工夫を凝らし絹織物業の急速な発展に寄与した。紅葉谷から飛鷹台へ登る段の右側に、大正6年建立の津田米次郎翁の銅像が高い台座の上に立っている。その右側は大正6年と昭和34年の顕彰碑が並んでいる。銅像は太平洋戦争末期の金属供出をまねかれた珍しいものである。



19 日本中国友誼団結の碑

碑の中央に「日本中国友誼団結」と刻まれ、左下に建立の趣旨などを記したブロンズ板がはめ込まれている。昭和44年(1969)日中友好協会・日本国際貿易促進協会県支部によって建てられた。碑裏には1965年4月日中友好協会会員などが中国訪問の際、郭沫若から託された七言絶句が記されている。
漢唐常教一筆軌 誰期兄弟同於埕
而今凱流天壤 共掃妖氛淨八荒

20 清水誠先生顕彰碑

1846～1899 科学者

金沢生まれ。明治3年(1870)フランスへ留学し工学を修める。留学中から、マッチの製法を研究していたが、製造法の改良に苦心のすえ、輸入を削減し輸出するまでになった。この碑は津田米次郎翁銅像の上、飛鷹台上にある。昭和39年9月清水誠顕彰会の建立で、碑面には「清水誠先生顕彰碑」と刻み、碑裏には略歴・建立者(顕彰会)などが刻まれている。題字は皇山一清の書である。



21 井並長太翁の像

1871～1931 畜産業

子供ころから畜産を志し、大正2年(1913)常設家畜市場を設立し石川県畜産業の基盤を確立、業界の発展に努めた。昭和33年(1958)県産食肉商業協同組合など、石川県下の畜産関係有志によって建てられた。題字は当時の衆議院議長益谷秀次の書、碑文は富山大学学長梅原眞隆作。

22 日蓮上人銅像

1222～1282

12歳で出家、建長5年(1253)清澄山で日蓮宗を開く。苦難の道を歩み続け、弘安5年入滅、日露戦争のとき、金沢市内の日蓮宗信者がこゝで毎日戦勝祈願をしたが、これを記念して大正7年(1918)米沢喜六など十数人の人々が発起人となり建立。工事には信者をはじめ、近くの学校からは小学生まで奉仕したといわれる。題字「立正安国」は村雲日栄(尼門跡瑞龍寺第十世・伏見宮家王女)・「識法華者可得世法」は東郷平八郎元帥の書である。



23 故奥村三策頌徳碑

1864～1912 鍼灸師・教育者

3歳で両眼を失う。明治4年(1871)金沢藩医久保三柳に師事し鍼術・按摩を学ぶ。視覚障害者の社会的基盤の確立に尽くした。没後25周年を記念して昭和12年(1937)鍼灸按摩マツサージ組合によって建てられたもので、碑面には「故奥村三策頌徳碑」、裏面に賛辞を刻む。碑の右前に碑建立50周年を記念して昭和62年金沢鍼灸マツサージ師会が建てたこの碑のいわれ書がある。

24 鶴彬川柳句碑

1903～1939 機業

本名は喜多一二。昭和3年(1928)高松に川柳会をつくり文芸運動から階級運動へ移り、この頃ナツプ(日本プロレタリア文芸連盟)高松支部をつくっている。昭和5年金沢歩兵第7連隊へ入隊、反戦活動始める。36歳で獄死。「暁を抱いて闇にいる蕾」と自然石に刻まれた。昭和40年(1965)鶴彬顕彰会建立の川柳句碑である。

25 西村公鳳句碑

俳人・会社役員

本名西村省吾。昭和23年「北国俳壇」が創刊され選者になる。同27年「風」に同人として参加。同31年5月現代俳句協会会員に選任される。「雑像」などの句集を出している。昭和39年公鳳句碑建設委員会が建てた「綻ぶや雪百日の傷枝」と自筆の句を刻んだ自然石の碑がある。

26 殉職警官の碑

明治22年(1889)以降、治安の維持・災害の救助など警察活動の中、殉職された方々を祭った慰霊碑である。玉兎ヶ丘の奥にある。三段の台上に造られた横長の大きな石碑。昭和8年5月警察協会石川支部によって建てられた。毎年秋に慰霊祭を行っている。

27 殉難消防団員の碑

明治39年(1906)以来の県下殉難消防団員を祭った慰霊碑である。卯辰山運動場の小、小高い扇ヶ丘に、六角の台上に加賀消防の「まとい」を形どって作られた碑が建てられている。昭和10年(1935)石川県消防協会によって建てられた。

28 由比勘兵衛塚

由比勘兵衛光清は3代藩主前田利常の家臣で後藤又兵衛・塙団右衛門と並び称せられた豪傑で槍の名人であった。「金沢城の見えるところに葬ってほしい」との遺言で、寛永3年(1626)この辺りに墓を建てたといわれる。「由比勘兵衛之塚」と記した石碑と由緒を書いた金沢市教育委員会の立札が立っている。現在のものは移転再建したものである。

29 相撲場記念碑

三箇の自然石の上に、大きな石を立て、表面に心・技・体の文字を刻んだ三枚の黒御影の石をはめ込んだ。昭和35年(1960)に造られた相撲場入り口右手にあり、昭和56年石川県相撲連盟によって建てられた。この相撲場は野外相撲場としては日本有数のもので、毎年こゝで行う高校相撲全国大会は有名である。

30 殉難豊川女子挺身隊員世界平和祈願像

昭和20年(1945)8月7日、愛知県豊川市の豊川海軍工廠が空襲にあつて、石川県からの女子挺身隊員も52名の犠牲者を出した。この隊員の慰霊のために建てられたもの。相撲場奥の高台に、上部に吊り鐘をつけた塔の前、等身大の乙女の像が立っている。昭和37年(1962)建立の「平和祈願像乙女の像」で、矩香成の作。題字は佐藤春夫書。像の前には水声光子の挽歌「これやこの少女ら 生きてあれば いまは人の妻 子の母なるを 緑葉の色めくごと 春はなのはなやくごと いきてあれば とりどりなるを われら哭く こゝに哭かねば いづこにひとの嘆く辺ありや」も添えられ、左側には「殉難乙女の像建立の趣意」を刻んだ石碑が建てられている。

31 徳田秋声文学碑(含室生再生詩碑)

本名徳田末雄は金沢市横山町生まれ。明治27年尾崎紅葉の門に入る。処女作「菟柑子」を初め多数の作品を発表、明治・大正の代表的作家となった。武家屋敷の塙を模した白壁に瓦屋根つき土塙の形をした徳田秋声文学碑がある。金沢出身の工学博士谷口吉郎の作。壁面右上には、秋声の自筆で「書を讀まざること三日、…」と記した陶板をはめ込んだ。碑の中央前方に「秋声文学碑」と記した標柱が建つ。秋声碑の左下には屋生自筆の秋声の略歴や「生きのびてまた夏草の目にしみる」の辞世の句が、九谷焼陶板三枚に焼いて取り付けられている。

32 金沢市民憲章の碑

金沢の美しい自然と文化を基盤とし、金沢市民の指向を明らかにした五項目からなっている。望湖台の奥、展望台を降りたところにこの碑が建っている。みかけ石の碑の表に「金沢市民憲章」を記したブロンズ板を取り付けたもの。昭和55年金沢菊水ライオンズクラブの建立。



33 岡良一顕彰碑

1905～1994 医学博士・政治家

金沢市小立野生まれ。昭和14年、県議に初当選し、保守の風土に初めて革新の灯をともし、以後市議、衆院議員6期、金沢市長を2期務めた。望湖台へ上がるとすぐ左に二つの石碑がある。昭和55年(1980)岡良一顕彰会の建立で、左側の碑には「夢を見ることのできない人は明日を生くる力がない 金沢名誉市民 岡良一」、裏に「反骨の碑に頂上の風還れ 山本清嗣」の句と発起人の氏名が刻まれている。右側の碑には芸術院会員・文化功労者高光一也撰文の岡良一顕彰のことが記されている。

34 キリスト教殉教者の碑

昔この谷間を湯座屋谷と呼んだ。明治2年(1869)長崎浦上村のキリスト教徒のうち510人が加賀藩預かりとなり、同6年に送り返されるまで幽閉されていた所である。「義のため迫害される人は幸いである」と、聖書のことを刻んである。石碑の題字と由来書は徳田與吉郎の書である。裏面にはチブリア・ポンタツキヨ師の碑文が刻まれている。昭和43年(1968)建立。

35 北方心泉書碑

1850～1905 俳・書家

本名北方蒙(きざし)は金沢市木ノ新保生まれ。常福寺の14世住職で、明治時代に活躍した有名な書家である。嘉永3年(1850)同寺に生まれ、石川舞台らに学んだ。清国布教師として東本願寺から清国に派遣。仏教を初め書道など幅広く学び、近世書道第一流の名手とうたわれた。心泉の書碑は、碑面に大きく「麒麟鳳龍」の四文字、めでたい四つの霊獣の名を刻んだもので、高岡一傑出した人物を喩えて言う。昭和37年の建立。



36 金沢大学屍体解剖の塚・碑・墓

明治3年以降金沢医学館、金沢医大、金沢大学医学部の解剖体慰霊の塚と碑である。墓地の右側に明治16年(1883)に建てられた「解剖遺骸の碑」があり、正面には「解剖屍体之塚」の石標、その後ろに献体者の氏名を刻した墓標が並んでいる。碑文は石川県医学校長兼金沢病院院長田中信吾の撰である。左側には昭和62年(1987)金沢大学医学部学生による「献体の諸霊に」と題した慰霊のことが記したプラスチック板が掲げられている。



37 卯辰山公園創設記念碑

昭和2年(1927)建立の碑は「卯辰山公園創設記念碑」と刻まれている。この題字は金沢出身元文部大臣中橋徳五郎の筆である。この碑の横には昭和3年、当時の金沢市土木課長松江甚吉撰文の「卯辰山公園記」が建てられている。慶応3年の開拓から、昭和3年の公園完成までの沿革を記したもの。



38 箔業祖記念碑

昭和10年(1935)箔同業組合有志によって建てられた大きな立石の碑が、2段の石組の上に建てられている。表面上部には前田直行男爵の豪腕「箔業祖記念碑」、下部には黒本植撰文の碑文があり、裏面には安田孫兵衛を初め、藩政時代ひそかに製箔に従事していた人々の名を刻んである。台座の石組には「錦繡其心金玉其相」(釋堂 老人の題)と刻んだ石板がはめ込まれている。一段下の石組の左側には箔同業組合有志など、多数の建立協力者の名を記した大きな石碑が建っている。

39 山田逸山顕彰碑 1897～1959 写真家

本名山田恵吉は金沢生まれ。当時は芸術写真の黎明期で、逸山はこの先駆者として活躍、後進の指導に当たるなど写真界の発展に尽くした。一方、俳句にも造詣が深く、俳句誌「沢の光」を主宰した。正面の題字の左に「そはくのとおりいれなれど稲箒」と逸山の句が刻まれている。撰文は山本素律・篆額と書は小松砂丘。石川県写真師会を初め石川県俳句文学協会など多数の団体・賛助者や建設委員の名が記されている。碑石は旧 日本銀行金沢支店の円柱であった。

40 深川仁太郎氏碑 1829～1887

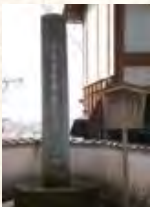
石川県江沼郡生まれ。金沢へ出て金沢の麹類業加登長に勤め刻苦努力のすえ、明治30年(1897)浅野川近くに店を構え、その後加登長浅野川本店と名乗ることが許された。この後も麹類業界の発展に努めた。昭和12年(1937)建立の大きな碑が2mほどの石組の上に建てられている。題字は沢野外茂次の筆である。

41 三雲塚

東山霊廟駐車場の左、奥まったところに三雲塚とよばれる臼田亜浪、小松砂丘、青柳菁々の三人の俳人の雲にかかわる句が記された石柱が建っている。昭和9年(1934)亜浪主宰の石楠20周年記念に建てられたもので、「稲田おほら雲冷やかに暮れてゆく」亜浪、「雲の上に立山すわる春日かな」砂丘、「ふるさとよ母よ夏雲は高く候う」碑々とあり、碑の裏側にも石楠派の人々の句が数多く刻まれている。

42 金沢九谷陶宗木米窯跡碑 青木木米 1767～1833 陶工・文人画家

幼名八十八、通称木屋佐兵衛、木米は号である。京都市生まれ。文化3年(1806)加賀藩の招きで来沢、卯辰山で試焼をして帰京。翌4年弟子の本多貞吉をとまなつて来沢し、春日山に初窯を揚げた。この窯跡に円柱状の碑が建立された。木米の来沢は本多貞吉が小松で若杉窯を興すなど九谷再興に大きな役割を果たした。石柱形で「金沢九谷陶宗木米窯址」と刻まれている。書は小松砂丘。



43 高村右曉筆塚 細野燕臺の書 1867～1954 画家

金沢生まれ。絵師の家に生まれ、20歳から京都で四条派の絵を学び、後金沢に帰り後進の指導に当たった。門弟は100人を超え、後年は俳句の道にもいそしんだといわれる。小坂神社入り口の鳥居の右側、路端に右曉の筆塚がある。表には「高村右曉先生」、裏には「水すみて石に声なし秋の風」と刻まれている。絵筆を納めたこの塚は絵画の門人や俳句仲間の人々が「右曉ゆかりのここを選んで建てたといわれる。

44 開道記念碑

大正15年(1926)汐見坂を工兵隊の作業で切り開き、開設した時の記念碑。小坂神社の鳥居をくぐりすぐ左手に開道記念と刻んだ大きな碑がある。題字は第九師団長伊丹松雄の書。在郷軍人会金沢市第七分会の建立。



45 臥雲島田先生之碑 1832～1893 教育者

本名山田定静、金沢市本多町生まれ。臥雲は号。人となりは温厚篤実、明治4年(1871)金沢藩の文学訓蒙、同8年石川県師範学校助教となり翌年同校教諭になる。定静はまた、仕事の余暇に子供達を教えるため私塾を開き、つねに数百人のものが教えを受けていたといわれる。北方家題額。



46 芭蕉巡錫地記念碑 松尾芭蕉 1644～1694 俳人

北陸にきたのは元禄2年(1689)、門人曾良を伴って出た東北への旅の帰り道のことです。有名な「奥の細道」の時である。このとき芭蕉はここ小坂神社に参拝し、句会を開いたと言われる。小坂神社の段を登っていくと右側の木陰に、昭和24年(1949)金沢蟻塔会建立の碑がある。正面に「芭蕉翁巡錫地」と刻み側面には北枝の句「此の山の神にしあれば鹿と月」が刻まれている。

47 森下冬青句碑

本名森下治作、金沢生まれ。大正10年(1921)川柳界に入る。同14年芽生川柳会を創設。昭和48年石川県川柳作家協会が設立されたとき、推されて理事長に就任。芭蕉碑の少し上右側に、自然石を二つ積んだ小さな碑がある。「落葉かく音海鳴りと重なりし」の句が刻んである。

48 塩田紅果句碑

三重県生まれ。弁護士・歌人 本名塩田親雄。若いとき作家を志したのが父の反対にあい、判事になった。昭和2年(1927)「蟻乃塔」を創刊。金沢蟻塔会の主宰。小坂神社の石段を登り詰めると本殿左手前に紅果の句碑がある。大きな自然石に「白梅の一ひらにある陽のめぐみ」の句が、自筆で刻まれている。裏面には昭和29年(1954)9月26日の建設年月日と建設委員4名の名が刻まれている。同43年ころ現在地に移す。

49 春日山少彦命名庵碑

医薬・禁厭の法を創めたと言われる少彦命名を記する庵を、春日神社の側に建てた由来が記されている。寛政12年(1800)に藩の隠医藤田義郷によって建てられた。

発行 金沢市観光交流課

金沢市広坂1-1-1 ☎076-220-2194 FAX076-260-7191
http://www.kanazawa-kankoukyoukaigai.jp

金沢旅物語 検索

2013.3 発行

50 弧庵馬仏句碑

馬仏は観音院の僧。高桑閑吏の門に入り弧庵と号した。金沢の閑吏門下の中心的人物ともいわれているが、生没年などもはっきりしない。本堂の一段下右手に、中央に「弧庵馬仏墓」と刻んだ自然石の墓がある。左脇に「死なばこそ西にひがしに月と花」と馬仏の句が刻んである。墓と刻まれているが、愛染院に葬られたともいわれ、はっきりしない。

51 中村芝加十郎墓

市川小団次の門人。三代嵐冠十郎らとともに一時衰えていた芝居を、安政5年(1858)ごろから盛り返すのに力を尽くした。本堂左手一段下がつた墓地の奥に、中村かしくの墓と並んで建っている。

52 田中雨人句碑

本名田中伊三郎、金沢生まれ。竹内菊園と出会い門に入る。17歳ごろから心連社句会に出席するようになった。また、ひさご会をはじめ公民館などで多くの人々を指導してきた。本堂前に二個の自然石の上に建てられた句碑で、「朝霞橋まで来れば山の裾 雨人」の句が刻まれている。裏面には昭和41年5月吉日の建立年月日や田中方月と建立者名や協賛者名などが記されている。

53 算聖関先生之墓

通称を新助、孝和といわれ、号は白山。幼いときから算数に優れ、算聖といわれた。武家に町家にも孝和に師事する者が多かった。晩年には江戸へ移る。本堂の右手に「算聖関先生之墓」と記した碑がある。孝和の150回忌に町家連中によって建立された顕彰碑。碑文は漢文体で略歴などを記している。この年、武家も寺町の立像寺に孝和の顕彰碑を建てている。

54 竹内菊園句碑

本名山田長太郎。俳諧は上田聰秋に師事し、古来の伝統を守ろうとして、大正2年(1913)金沢で「香風」を創刊。新傾向の俳句になじめない人々はしだいに菊園のもとに集まった。馬仏の句碑のすぐ後ろ上に菊園の大きな句碑がある。「ざん菊や我も老行く人数 古希菊園」とあり、裏面には「昭和十四年菊月建之 安念東浪発起一同」と刻まれている。



55 松田東英墓

金沢生まれ。本名は就、芹蘆と号した。幼いときから読書が好き医術を習う。金沢の医師松田氏の養子となる。江戸・長崎で学び、帰って医業を継ぐ。天保年間自分で顕微鏡や望遠鏡を作った。町の科学者。関先生之碑の左手に、この墓が建っている。碑文中の洮盤は現在豊国神社への石段上り口鳥居左手前にある。

56 蓮如上人銅像

長禄元年(1457)本願寺派8代法主をついだ蓮如は、越前吉崎御坊を造営し、加賀へ宣教に来る。庶民間の蓮如への思慕は厚い。この像は北国巡錫のたくましい姿を表現している。昭和7年(1932)建立の像は2m余りの石組の上にある。台座銘「顕應珠於死後」は大谷瑩亮の書。

57 桜井梅室句碑

金沢生まれ。初め馬来の門に入ったが、後高桑閑吏の門人になる。文化4年(1807)京都に出、文政6年江戸へ出て俳諧に励む。嘉永4年二条家から花之下宗匠の号を受ける。ここ宝泉寺に梅室の句碑が二つある。昭和36年(1961)の碑は本堂のすぐ脇、自然石に「一葉けふの命ぞ菊の露」の句が刻まれ、裏には句碑再興のことばが刻んである。他の一つは石組の上に三角形の石を積んだもので、「屋の棟にそふて殖けり梅柳 梅室」と自筆の句が、碑陰には(己亥立秋 連中建立)と刻んである。昭和34年の建立。

58 柳陰軒跡碑 鶴屋句空

加賀蕉門の逸材。京都で仏門に入り、句空坊または句空法師といった。後卯辰山に草庵を作り柳陰軒と名付けた。元禄2年(1689)金沢へ来た芭蕉が立ち寄り、鶴屋句空の草庵「柳陰軒」をしのんで句を残したと伝えられる。句空の柳陰軒跡を記念して建てられた碑がある。境内へ入ってすぐ左に「柳陰軒址碑」と刻んだ自然石に「ちる柳あるじも我も鐘を聞く 芭蕉」の句が記されている。

59 初代・中村歌右衛門の墓碑

中村歌右衛門は、金沢の医師大関俊安の子。平安・浪花・東部に流寓すること多年、李國の弟子となり、遂に、悪役を以て随一とうたわれた名優となる。屋号「加賀屋」。墓碑は真成寺にある。